

発 明 文 化 論

〈第 50 回〉

丸山 亮

監 視 社 会

北朝鮮の金正日総書記が突然死去したと報じられたとき、予想されるこの国の動きについて、日本、アメリカ、韓国などの国は、互いに連携をとりながら監視していく必要があるという談話をすぐに発表した。国自体が監視下に置かれるわけだが、当の総書記について、日米韓ロシアなどの情報機関は日ごろ動静を注視していたにもかかわらず、死去後 50 時間を超えた北朝鮮自らの発表まで、このニュースをつかんでいなかったようだ。日本国内でも安全保障上の見地から、監視態勢を強化すべきだという意見が強まっている。

近代社会では、プライバシーは基本的人権として尊重されるのが建前だ。けれども犯罪の抑止や、あらかじめ事故などの危険が予想されるところでは、一定程度の監視が必要なことも確かで、監視の許容と抑制は情勢によって変動する。ロンドンでは地下鉄テロの後、街の随所に置かれる監視カメラが増やされることになったというし、日本でも確実に増えている実感がある。また、経済犯罪を取り締まるため、経済活動を分析しながら損失隠しなどの違法がないかを見張る証券取引等監視委員会のような機関もある。現代は個人も組織も、すべて直接、間接の見張りを受けている監視社会なのだ。

北朝鮮では総書記の死後、弔意を表す人の姿とともに監視の影も濃いという。指導者への忠誠が絶対視される社会では、それに背くものがないか常に見張られているのだろう。

フランスの思想家ミシェル・フーコーが「監獄の誕生—監視と処罰」で取り上げて有名になったパノプティコンとよばれる監獄施設がある。一望監視施設と訳され、円形に配置された監獄の独房を、中心にある監視塔からすべて観察できるようになっている。もともとはイギリスの功利主義者ベンサムが最小限の監視費用で犯罪者を見張り、更生させる施設として提案したものだが、フーコーはこれを管理、統制された社会の比喩として、否定的にとらえた。監視の影におびえる北朝鮮を思えば納得できよう。

先ごろ東京の NTT インターコミュニケーション・センター (ICC) で「三上晴子 欲望のコード」という展示を見た。薄暗い大きな部屋に入ると、正面の壁に自分の身体がモザイク化され、さまざまな映像と合成されたものが映っていることに気付く。立ち位置を右に左に移動すると、天井からロボット・アームがぶら下がったビデオカメラが体の動きに追尾して動き、正面の映像だけでなく、足元の床にも投影された映像を変えていく。この空間にいる限りカメラがとことんついて回り、逃れられないといっているようだ。一種のアート体験と割り切れれば、自分の映像を自ら操作して楽しむ余裕が生まれるが、それには時間がかかり、しばらくは居心地の悪さを我慢しなければならない。現代の監視社会の縮図ということもできる。ただ、ここには一方的な監視にさらされるだけでなく、監視の視線に向かい、あるいはそれを乗り越えて反応することが可能だとも示唆されていた。

事実、2010 年暮れからアラブのジャスミン革命はインターネットという新しい連帯の手段を手にした民衆が独裁者の監視を越えた逆モーションだった。さらに米国のウォール街占拠に始まるオキュパイ運動、福島原発の事故後の脱原発運動などもあげておこう。これらは従順な市民とされていた人たちが監視の拘束を乗り越え、地球倫理による共同体に向かおうとする動きだったのではないか。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)